



ビッグデータとフィールドワークで地域の課題を可視化する

高等学校第1学年 総合的な探究の時間 「地域の課題を解決しよう」

■単元の目標

地域の現状や課題を探究し、データ分析やフィールドワークを通じて多角的に課題を捉えたうえで、実社会の視点を取り入れた解決策を考察し、論理的に表現・発信する力を養うとともに、課題解決に向けて主体的・協働的に取り組む態度を育てる。

■単元の概要

地域課題をテーマに、RESAS等のデータ分析とフィールドワークを通して課題の実態を多角的に捉え、地域の人々に向けた提言としてまとめる。

■単元の指導計画（70時間）

第1小単元

「地域の課題を理解する」

- ・地域の現状や課題を知り、探究テーマを設定する。
- ・市の職員の講話や企業の出張講義を通じて、地域経済や産業の課題を学ぶ。
- ・RESASなどのデータ活用を学ぶ。

第2小単元

「現場の課題をデータで検証する」

- ・フィールドワークを行い、地域の課題の実態を把握する。
- ・企業や地域の人々からの意見を聞き、課題の多面的な要因を探る。
- ・RESASや統計データを活用し、フィールドワークで得た情報と照らし合わせて分析する。

第3小単元

「成果発表と振り返り」

- ・プレゼンテーション資料を作成する。
- ・地域の関係者からフィードバックを受ける。
- ・フィードバックをもとに提案内容を改善する。

■小単元の概要

地域の現状や地域課題について、講話やデータ分析を通じて学ぶ。企業と地域の関係性に着目し、地域経済の課題を探る。RESASを活用し、データを基にフィールドワークの視点を整理する。各グループで探究テーマを設定し、調査計画を立案する。

フィールドワークで得た住民の声や観察記録を、RESASの統計データや地理情報と比較し、住民の主観的な印象や感情的な意見と、客観的なデータの整合性を検討することで、地域の課題の具体的な要因や構造的な問題を明らかにする。

探究の成果を論理的に整理し、発表資料を作成する。クラス内での発表を通じて、発表の精度を高める。その後、学年代表による発表会を行い、市の職員や企業関係者からのフィードバックを受け、提案内容を改善する。

■資質・能力が育成され「深い学び」が実現している子供の姿（第2小単元）

【学習活動の場面】

生徒Aは、地域の少子高齢化を実感していた。RESASを用いて地域の人口推移を調べると、今後も少子高齢化が進行することが明らかになった。そこで、なぜこの地域で少子高齢化が進行するのか、どのようにすればその進行を抑えられるのかを探り、具体的な提言を考えることにした。

【子供の「深い学び」の姿】

生徒Aは、今後の少子高齢化の傾向について関心をもち、**RESASを用いて近隣自治体と比較**することにした。その結果、地域の若年層の流出が顕著であることが分かった。生徒Aは「子育て支援の不足」を要因として**仮説を立て、実際にフィールドワークで子育て世代や若者にインタビュー**を行った。その中で、「進学・就職の際に都市部へ出ることが多く、そのまま戻ってこない」という意見が多く寄せられた。

生徒Aは、「若者が戻ってこないのはなぜか」と疑問を深めた。**クラウドにアップロードされた他の生徒の調査結果**にも目を向けた。生徒Bの調査では、進学・就職の流出率が似ていても、地域によってはUターン率が高い自治体もあることが示されていた。生徒Aはその要因を探るために**RESASの産業・雇用データと照らし合わせて分析**した。その結果、この地域では専門職やIT関連の仕事が少なく、また住宅価格や生活環境の違いも影響している可能性があることに気付いた。

生徒Aはこの学びを通して、「これからは『戻ってきたくなる地域』の条件をもっと考えてみたい」と振り返った。

【当該指導での「深い学び」】

生徒Aは、当初は「子育て支援の不足」が少子高齢化の原因だと考えていたが、データと住民の声を組み合わせることで、「仕事の選択肢の少なさ」「住環境の魅力の不足」など、複数の要因が絡み合っていることに気付いた。生徒Aは「若者が定着するためには、どのような施策が必要なのか？」という新たな問いを立て、産業の振興や住環境の整備など、多面的な視点から施策を考えるようになった。

【活用したソフトや機能】 RESAS（地域経済分析システム）

■指導上の工夫とICTの利活用

① データの効果的な活用のための講座を設定する

* 生徒がデータを効果的に活用できるように、RESASの基本的な操作方法やデータの見方を学ぶ講座を実施する。生徒が「データを使う意味」を理解できるよう支援する。

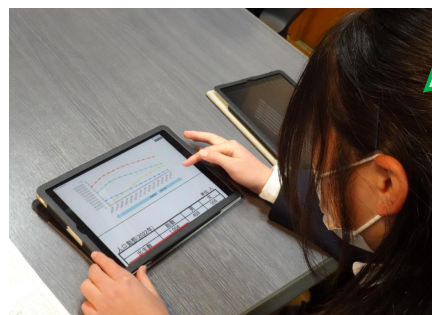
② 仮説設定を支援する問いかけを行う

* 生徒がデータをもとに仮説を立てる際、教師が「このデータからどのような可能性が考えられるか」「どの視点が抜け落ちているか」といった問いかけを行い、思考の枠を広げるよう促す。また、データに現れない社会的要因にも目を向けるよう支援する。

③ フィールドワークで得た情報や他者の分析を生かす

* RESASなどのデータだけでは住民の実感や生活の質までは見えてこない。そこで、フィールドワークを通じて現場のリアルな声を収集し、データと比較することで課題の本質を探る探究活動を設定する。

* クラウドで他者参照を可能とすることで、他者の分析も参考として、更に自分の分析を高度化することができる。



学習指導要領や解説との関連

学習指導要領 第4章 総合な探究の時間

第1 目標

(2) 実社会や実生活と自己との関わりから問いを見だし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができるようになる。

出典：高等学校学習指導要領P475

学習指導要領解説 総合な探究の時間編

第2章 1 探究が高度化し、自律的に行われること

一つは、探究の過程が高度化するということである。高度化とは、①探究において目的と解決の方法に矛盾がない（整合性）、②探究において適切に資質・能力を活用している（効果性）、③焦点化し深く掘り下げて探究している（鋭角性）、④幅広い可能性を視野に入れながら探究している（広角性）などの姿で捉えることができる。

出典：高等学校学習指導要領解説 総合的な探究の時間編P9

学習指導要領や解説との関連

学習指導要領解説 総合な探究の時間編

第9章第3節 1 学習過程を探究の過程にすること

② 情報の収集

一つ目は、収集する情報は多様であり、それは学習活動によって変わることである。（略）特に、総合的な探究の時間では、体験を通した主観的で感覚的な情報だけでなく、数値化された客観的な情報などを幅広く多様に収集することが大切であり、そうした情報が生徒の課題の解決や探究活動を質的に高めていく。